

## 教学の現代的把握

### 撰折論の現代的把握（日蓮聖人の撰受観をめぐって）

（日蓮宗現代宗教研究所嘱託）

早坂鳳城

一

近年、大聖人の撰受・折伏についての議論がおこなわれていることは、宗門関係者周知のことです。既に多くの方々の優れた論攷が発表されており、小稿などは屋上に屋を重ねることにしかならないかもしれませんが、大聖人の教学の基本的なことに関する問題であり、現代に於ける布教伝道という問題とも密接に関わることでもあるので、この機会に、若干の考察を試みたいと思います。

言うまでもなく、近年この問題がクローズアップされてきたのは、今成元昭博士が、大聖人の本懐は撰受にある、という学説を発表されたことに始まります。

従って、ここでは、博士の御所論を検討する形で議論を進めて行きたいと考えますが、上述の通り、既に多くの論文等が発表されており、今成博士のものも相当数になりますので、既になされた議論を見落とすことがあるかもしれません。しかし、平成十五年三月に宗務院で開催された現宗研主催の教団論研究セミナーにおいても、博士は、問題の発端となった『統一』誌への一連の御寄稿を資料として配布されてもおられ、そこには、『福神』第四号を参照するように記されていますので、ひとまず、『統一』誌と『福神』誌での博士の見解を、検討の対象として差し支えない

いものと考えます。

さて、始めに言及しておくべきは、博士の基本的な立場、問題意識についてであります。

博士は、『福神』での御所論の中で、まず、一般に抱かれている大聖人のイメージ、それをもたらしているであろうところの折伏のイメージを問題にされ、「もし本懐を折伏であるとするならば、折伏は武器を持つことも良いし、相手を罵倒することも良いんですから、現代の世界情勢からいってですね、何かを発言する時に歯切れが悪くなってしまう」とか、「立教開宗七五〇年のこの『立教』の立脚点が、本来的に武力行使を是とし、悪口も罵倒も悪くはないという折伏に根ざすものであるとするならば、『異教徒との対話』とか『宗教共同体』とか云ったって歯切れの悪いものにならざるを得ない」などと指摘されています。或いはまた「武力を可とするということにしたり、それから相手を罵倒することがあるんだとすると、どうも現代の風潮からするとまずいということになるし、だいたい日本の憲法にも反するじゃないですか」などとまで、何の屈託もなく仰っておられます。

こうした今成博士の一連の発言から、「阿世」ということばを連想してしまうのは筆者だけでしょうか。

大聖人の本意本懐の如何を検討すると云いながら、要は現代の情勢に合わせて、日蓮聖人の思想に不都合があるなら訂正しよう、摂受と言った方が都合がよいではないか、ということのように思えるのです。

すなわち、有り体に言えば、大聖人の本意が折伏にあるとすると、時代状況とそぐわないところがあるし、実際に、現代の本宗は折伏を実践しているわけでもないのに、宗祖の本意を裏切っていることになりかねないけれども、大聖人の本懐は摂受にあったということであれば、他教団との友好関係を構築したりするにも都合が良いし、現下の宗門の在り方も肯定されるではないか、という発想に立たされているのではないかと思われるのです。

今成博士は、宗門には「何が何でも、折伏」という枷が存在したことを指摘されているのですが、逆に、博士の方が、時代状況に合わせるために「何が何でも、摂受」ということになってはいないかと、訝しまれるところです。

無論、たとえ問題意識がそうであっても、要は学的に正確で誠実な議論がなされた上で、撰受であると論証される、ということであれば、問題ないとも言えなくはないのですが。

## 二

さて、以下、博士の論点の幾つかについて検討したいと思います。

博士は、大聖人が

撰受・折伏の二義、仏説に任ずる。敢えて私曲非ず（『富木殿御返事』）

と記される、その仏説とは、

勝鬘經云、撰受 折伏

とある断簡にも記される通り、主として勝鬘經は、「撰受正法」の重要性を強調している經典であると指摘されています。

ところで、伊藤瑞叡博士の御研究（『法華学報別冊 撰折論の新研究』上・下）によって明らかのように、勝鬘經において、「撰受正法」と説かれる際の「撰受」と、「撰受・折伏」という際の、「折伏」の対語としての「撰受」は、原語の異なる別概念のタームであります。

すなわち、今成博士が、勝鬘經の説に基ずいて、「調伏の大願」であると主張されるところの「撰受」は、「撰受・折伏」の「撰受」ではないのです。

この一事を以て、博士の、「仏教の心と言葉 撰受・折伏（二）『勝鬘經』の撰受正法」という、近年の撰受論争の発端となった論攷に記されている内容は、実は、大聖人の撰折論とはほとんど無関係であるということが明らかにな

ります。換言すれば、「撰受・折伏」の何たるかを取り違えてしまったところから出発しているのが、今成博士の撰折論であるということです。

付言すれば、この二つの「撰受」の原語の相違ということについては、だからといって、日蓮聖人がその原語の相違ということをキチンと把握されていたかどうかは不明であり、日蓮聖人も今成博士と同様に、二つの撰受を混同した可能性を指摘することも論理的には可能ではありますが、流石にこれは無理な議論と云ってもよいでしょう。例えば、二つの撰受の原語の相違について伊藤博士が指摘される以前に、『統一』誌編集部の西條師は、今成博士の『勝鬘経』の「撰受正法」の解釈に疑問を呈せられています（『福神』第五号所収「撰受―折伏／今成説への疑問」）。西條師でも気付いた二つの撰受の相違について、日蓮聖人が気付かなかったとは考えられない、と言っては西條師に失礼になるでしょうか。否、恐らく西條師も、その通りと仰ることでしょう。

### 三

今成博士の論点は、ほかにも、

- ・ 『開目抄』の「常不輕品のごとし」について
- ・ 『如説修行抄』等の真偽

などがありますが、いずれも、伊藤博士や、あるいは、東京西部の教化センターの『教化情報』誌に掲載された大賀義明氏の論攷などによって、ほぼ論駁、ないし今成博士の論は論証ではないことが論証されている事柄であると考えますので、いちいち論じません。

但し、『開目抄』の「常不輕品のごとし」については、敢えて付言しておくこととします。

今成博士は、「心の師とはなるとも、心を師とすることなかれ」という文の出典を『六波羅蜜經』と記す『兄弟抄』の記述を、先師が書き換えてしまったことについて、「日蓮聖人を思う心のあまりですね、恥をかかせたくないということ御遺文そのものを変えてしまっているんですね。／＼ところが実際にはあるんです。『大乘理趣六波羅蜜多經』の原文を調べてみればすぐ分かります。これはですね、あまり努力しなくても見れば分ることですよ、あるかないかということは。そんな単純な仕事さえ何百年来なされてこなかったんです。」と鬼の首を取ったように得意満面に記されています。そして、そのように先師を愚弄されたその御本人が、日蓮聖人が「常不輕」とお書きになつてゐるのは、『開目抄』のこの部分だけであり、それは後世付加されたものであると断定して、「それだけでもですね、これを付け加えた人はちよつと勉強不足だったんではないかと思うんですね。日蓮聖人は絶対『常不輕菩薩』とか『常不輕品』とかいわれない方なんです」とまで仰つておられました。

ところが、大賀氏の指摘されたごとく、御真蹟のある『断簡三二一』にも、「常不輕」の語があるのです。もう一度引きます。

「あまり努力しなくても見れば分ることですよ、あるかないかということは。そんな単純な仕事」  
「勉強不足」

「日蓮聖人は絶対『常不輕菩薩』とか『常不輕品』とかいわれない」

無論、『断簡三二一』に「常不輕」の語があることは、『開目抄』に「常不輕品のごとし」の句があつたことを証するものではありません。しかし、それがなかったとする博士の議論のいかがわしさを証して余りあるものであると言えるでしょう。

博士は大賀氏のこの指摘を受けてか、「真蹟断簡中に一箇所『常不輕』という語が見出されるが、それを含む断簡とは（中略）日蓮の通常の表現と相違するものであつて、或は他の文献の引用ではないかと疑われもするのである

が、もしこれを日蓮自身の作文であると仮定しても、四語仕立の偈文様式という制約のもとでの『如常不軽』の一例を以て、日蓮遺文一般から得られた用語法の原則に異を唱えることは許されないと補足されるに至っています。（『日蓮論形成の典拠をめぐって』、『日蓮教団史論叢』所収）。

理屈と何とかはどこでも付く、ということでしょうが、大聖人は「常不軽」とは「絶対」に言わないとまで断言された挙げ句の言い逃れがこれです。一切経を手元に置いていたわけではないであろう先師が、十巻の經典中の短い一節を見落としていたことを「勉強不足」というのも結構ですが、現代ではパソコンで簡単に検索出来るにも拘わらず、それすらせず、真蹟遺文には「常不軽」は「絶対」にないと言い切ってしまった御自身の「努力不足」も反省されては如何でしょうか。

靈山で苦笑される日蓮聖人の顔が、眼に見えるようです。

その他、博士の議論には、「日蓮聖人御自身は撰受折伏とはあんまりおっしゃらない」「撰受とか折伏とかいうことは些末な問題だとお考えになっていたんではないかと思えます」と仰りながら、「本懐は撰受」であると言い切つて疑わない（重視していないことや些末であると考えていることを「本懐」とする人がいるでしょうか？）とかいうような、極めてユニークな論理展開をなさることが散見されることも、この際ですので指摘しておきます。

#### 四

ところで、この問題を考える上での最大のキー・ポイントは、常不軽菩薩であると考えます。

今成博士は、常不軽菩薩の但行礼拝を撰受であると考えておられます。筆者は、伊藤博士の論証されたように、それは折伏であると考えるものですが、ともあれ、今成博士は、常不軽菩薩の但行礼拝を撰受であると捉えた上で、大

聖人は常不輕菩薩の後継者を以て任じておられた、と主張されます。

大聖人が摂受・折伏のいずれの立場をとられたと考える方でも、或いはまた、いずれの立場にも偏しなかったと考える方でも、大聖人が常不輕菩薩を継承するものであることを自任されておられたということ自体に異論のあるむきはないであります。

ところで、今成博士も認めておられるごとく、日蓮聖人の実践は折伏でした。仮にそれが博士の仰るように「ただその時々的情勢で強く折伏的实践をなさった」のであるとしても、周囲から「御前は摂受をやらないからこんなひどい目にあっているんだ、と責められた」ほどに、折伏を实践されたのです。

では、日蓮聖人は、御自分の実践（折伏）とは異なる実践（摂受）をなさった常不輕菩薩の後継を以て任じられたのでしょうか。今成博士によれば、「折伏があつたつて良いじゃないか、という開き直り」をした日蓮聖人が、如何なる迫害をも忍受されて「但行礼拝」という「摂受」の實踐を貫徹された常不輕菩薩を継承しているつもりでおられた、ということになります。そんなことがあり得るでしょうか。あり得るとしたら何故でしょうか。

但行礼拝を摂受であると強弁する以上、今成博士はこの問いに答えなければならぬであります。

私は日蓮ではないから判らない、などという逃げ口上では誰も納得しません（東京西部での公開討論会の席上、同様の質問に対し、今成博士はそう答えられたと聞いています）。

恐らくこうした批判が耳に入つてのことでしょうが、九月の中央教研では、ついに博士は、「日蓮聖人は一切折伏をしなかつた」とまで言明されておられました。日蓮聖人の教化の全ては摂受であつた、と言うのです。

これまた「折伏」は暴力であるという誤解に基づく見解であり、また、既引のこれまでの博士の発言との整合性に疑問を呈さざるを得ないところでもあります。ともあれ、そのようにでも主張しないと、論理的に破綻してしまう無理に無理を重ねた議論が摂受正意論であるということ、このことは端的に示していると言つてもよいのではない

かと思われれます。

## 五

現下宗門で行なわれている常不輕菩薩の但行礼拝についての解説や説明には、仏性への礼賛といった面のみを強調し、それを折伏であると見なす解説を記さないのみならず、それが逆化であるという視点すらを欠いたものが散見されます。

また、筆者の周囲で今成博士への賛意を示す方に伺うと、但行礼拝を折伏と解することが納得出来ないという方が多いようです。(尤も、その方達でも、「日蓮聖人は折伏を行ぜられなかった」とする議論には与し得ないとは思いますが)。

更には、冒頭に記したような今成博士の問題意識を共有し、それによつて、日蓮思想を曲解しようとするかどうかは別としても、現代に「折伏」と言っても通用しにくい、と考へておられる方も少なくないようであります。

このように見てみると、今成博士の折伏否定論は、決して、突然現れたものではなく、宗門の現状から出るべくして出てきた議論であるとも云いえるでしょう(今成博士の引用する『日蓮事典』にある如く、「宗門の大勢は撰受に帰」して来ているのです)。

この問題に対する学術的な議論は既に決着がついているものと筆者は考へていますが、学術的な結論が出ていからといって、上述のような状況、この問題が提起されてきた情勢がすぐに変化するわけではないでしょう。

そうとなれば、先ず、不輕行を宣揚することから始めてはどうか、と考へます。

今成博士は不輕行について、「あれを折伏だなんて云つたつて世間で通用しないですよ」と仰つておられます(ど



こまでも、世間や時流が判断基準であることに注意しましょう。

しかし、不軽行は折伏として通用してきた歴史を有するのです。不軽行を掲げながら、その受容史に対する理解を深めていきましよう。それによつて、不軽行に対する誤解を少しでも減らして行くことが出来るでしょう。

常不軽菩薩の行が折伏と理解され得ること（「折伏であること」でなくとも構いません）への理解が広まれば、何しろ、誰も不軽行を否定する人はいないので、折伏」と云つても、何も「暴力的」になさねばならないのではなく、但行礼拝で良いのであるということになれば、折伏へのマイナス・イメージも和らいで行くことでしょう。

今般の撰折論争は、結局のところ、「折伏」への誤解から、それを敵視し、そのイメージを払拭することを目的として始められたものですので、「折伏」が敵ではないことが判れば、自ずと終息していくものと期待します。

今成博士は、ますます意気軒昂でおられるようですが、要は、常不軽の但行礼拝が「折伏」であると世間で通用し、それがマイナス・イメージを有さず、「異教徒との対話」に差し障りがないということになりさえすれば、博士も安堵されて撰受本意でなくてもよいとお考え頂けるかもしれません。

但し、それが「化導法」であることを忘れずに、と釘を差しておきましょう。

撰受であれ折伏であれ、言うまでもなく、それはあくまでも「化導法」です。現代の「異教徒との対話」には撰受でなければ、とお考えになる方々には、例え撰受であれ、「対話」に「化導法」を持ち込んで巧く行くのだろうか、と疑問を投げ掛けておかねばならないでしょう。

そして、何しろ、その「撰受」は、日蓮聖人の化導の一切を含むのです（何故なら、日蓮聖人は折伏を行じなかつたのですから）。「国家諫暁」や「四箇格言」を包含する「撰受」という「化導法」を以てする「異教徒との対話」が、今成博士や「撰受」論者の期待する成果を上げ得ると考えるほど、筆者は樂觀論者ではいられないのですが。